

第7部 (1) 説明打ち切り 決定的な溝

石巻市大川小は東日本大震災の津波で全校児童108人中、74人が犠牲となり、児童を保護していた教職員10人も死亡した。「なぜ、わが子は亡くなったのか」。学校管理下で戦後最悪とされる事故にもかかわらず、今も多くの遺族が納得できずにいる。第7部は真相究明を求める遺族たちの7年の軌跡をたどる。(大川小事故取材班)
=第7部は6回続き



説明会が終わり、会場を出る大川小の遺族ら。石巻市教委は2度の説明会で幕引きを図ろうとした=2011年6月4日午後8時45分ごろ、石巻市の飯野川一小

「この悲劇を世界中の人に知ってほしい」。2011年3月下旬、大川小6年の三男雄樹君
=当時(12)=を亡くした佐藤和隆さん(51)が河北新報社に電話し、こう訴えた。

東日本大震災で約1万8500人が死亡・行方不明となり、最大被災地・石巻市では約3700人が犠牲になった。当時、「大川小の悲劇」は無数の悲劇に埋もれていた。

3月30日付の河北新報は「なぜ多くの犠牲 保護者ら膨らむ疑問」の見出しで、遺族の間に芽生え始めた学校への不信感を報じた。

佐藤さんは当時の取材に「誰が悪いではなく、徹底的に検証してほしい。今後のためにも子どもたちの死を無駄にしてほしくない」と話し、既に「検証」という言葉を口にしていた。

大川小の生存児童を対象に29日、登校式が開かれた。当時の校長柏葉照幸氏は「つらいけれど、みんな明るい、笑顔で頑張っていけるようにしましょう」とあいさつ。子どもを亡くした親への説明はまだなく、遺族は「見捨てられた」との思いを募らせた。

初の説明会は遺族の要望を受けて震災1カ月後の4月9日に開かれた。震災当日、学校にいた教職員11人中、唯一生き残った男性教務主任(57)が「山の方で木が倒れたり…」と話す。母親の1人が「木は倒れてませんでした」と叫んだ。

教務主任は、山の斜面で倒れてきた木に体を挟まれた瞬間、波をかぶったが、近くにいた3年の男子児童とともに山を上がったなどと説明した。

「真実」を語ったと思われた教務主任。後に多くの疑問や矛盾が明らかになる。

遺族は教務主任の説明で真相が分かると期待したが、質問の機会はなかった。話し終えた教務主任は机に突っ伏し、説明会后、職員に守られて会場を後にした。遺族の前に姿を現したのは最初で最後となった。

2回目の説明会は6月4日。市と市教委は冒頭、「1時間限り」と通告した。初めて顔を見せた亀山紘市長の一言が、遺族との間に決定的な溝をつくる。

責任を認めようとしない市長に対し、いら立つ遺族が「市長も子どもいるんでしょう」と迫った。

「もし自分の子どもが亡くなったら、自分の子どもに思いを償っていく。自分自身に問うしかない。これが自然災害における宿命だということでしょうか」

市長は遺族に向けた言葉ではなく、「自分だったら…」と言葉を補ったが、「宿命」の二文字が遺族の胸に刺さった。

開始から約1時間45分後、一方的に閉会が告げられた。遺族が次の予定を尋ねると、「これで終わりです」。なぜ、約45分間校庭にとどまり続けたのか。明確な説明がないまま、市教委は2度の説明会で幕引きを図ろうとした。

「遺族は納得したのか?」。当時の学校教育課長山田元郎氏は報道陣から問われ、「納得した。遺族からは特に何も出ませんでした」と答えた。

納得できるはずもなく、遺族の心に消せない傷が深く刻み込まれた。